

FRONT
OF
VIEW

サザエさんの黄昏？



第一生命経済研究所 顧問

大森 泰人

昨年、親戚の法事の待合室で、久々に「サザエさん」を見るときもなく眺めた。専業主婦のサザエさんもパートに出たが、タラちゃんが寂しがると2日でやめてしまう。保育園に落ちたブロガーなら、「タラの面倒くらいフネが見りゃいいじゃん」と怒りのツイートを打つかも知れない。「でもね、実はフネさんは波平の後妻で、サザエさんは実の娘じゃないから、タラちゃんも実の孫じゃないんですよ」なんて無用のツッコミが思い浮かぶのは、かつてのベストセラー「磯野家の謎」に由来する。なにせ国民的アニメだから、かつてはこんなトリビアも酒の肴くらいにはなった。サザエさんに現代を反映させようと試みると、変えるな、と固定客から苦情がくるとテレビ局がぼやくのを聞いたことがある。でも、三世代世帯が減って現実感が希薄になるなか、視聴率はじわじわ下がり、変わらない良さも効かなくなってきたらしい。これが、「三丁目の夕日」だと続編のたびに時代は進み、テレビなど三種の神器が備わる過程を高齢者は懐かしみ、若者は新鮮に感じる。が、磯野家のブラウン管テレビは薄く大きくはならず、黒塗りの固定電話はスマホにはならない。最盛期に比べ視聴率が落ち黄昏感が漂っても、相対的にはまだ高いので、路線を変えるか否かは悩ましい判断と想像される。

かつてサザエさんの原作者を若き田中裕子が演じた朝ドラ「マー姉ちゃん」を国民の半分が見た。今や視聴者の主力は高齢者だから、孫娘みたいな主人公の頑張りを応援したい「とと姉ちゃん」の久々の高視聴率も、「マー姉ちゃん」の半分以下に過ぎな

い。無縁社会化が進み、1人暮らしで、孫と交流などしたくない高齢者は、初めからターゲットから外れている。そんな状況で、サザエさんの時代を進めながら現代を反映させようと試みれば、固定客まで失いかねない。定年を迎えた波平は、継続雇用だと賃金が下がるのが納得できずに退社するが、管理職として納得できる再就職先は見つからず、自らの市場価値に落胆する。マスオの会社は外資メーカーの傘下に入り、ノルマが厳しくなってノイローゼ気味になる。大学入試や就活がままならなかったカツオは親元で生活し、コンビニでバイトしながら売れないマンガを描いている。この様な世界を描いては、変わらないサザエさんを好んできた視聴者は失望するかもしれない。でも三世代世帯は、一億が総活躍する社会を目指すなら、有益なロールモデルになる。育児の受け皿になる三世代世帯は核家族世帯より妻の正規雇用割合が明瞭に高い。そして、波平は不本意に始めた接客業で生き甲斐に目覚め、ドメスティックだったマスオはグローバルに活躍し、カツオのマンガの才能も開花する。やがて波平やフネに介護が必要になれば、正規雇用だったサザエさんもパートに切り換え、地域との交流に支えられて家庭内介護に取り組むようになる。

変えたら失敗するかもしれない、と考えて変われないことはよくある。でも変えたら成功すると分かっている程度の変化なら、他のみんなも分かっている。それでは競争に勝てない。勝つには、失敗か成功かが分かる前に変わり、失敗したらまた変わらねばならない。と理屈は分かっているけど、実践は容易じゃないし、民間人になっても行政官感覚からなかなか変われない私が言うのは、説得力に乏しいだろう。でもこの国で、変わらないものを象徴してきたサザエさんのチャレンジには期待したい。